

岡村龍男著『渋沢栄一と静岡 改革の軌跡をたどる』
静岡新聞社、2021年

宮崎 晋生

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第20巻第2号(2022年3月)抜刷

【書評】

岡村龍男著『渋沢栄一と静岡 改革の軌跡をたどる』 静岡新聞社、2021年

宮崎 晋生

はじめに

渋沢栄一の生涯は2021年 NHK 大河ドラマ『晴天を衝け』の放映をきっかけに全国的に注目を浴びている。ただ、1868年末～1869年10月の間、宝台院（静岡市葵区常磐町）に謹慎蟄居中の徳川慶喜への渡欧帰朝報告をきっかけに滞在することになり、「商法会所（のちに常平倉）」を率いて経済振興に手腕を発揮した静岡では、その足跡はこれまでほとんど省みられていなかった。

手前味噌であるが、2019～2020年度「渋沢栄一の足跡をたどる しぞーか町歩きMAP」を評者の担当する国際関係学部科目「ベーシックスタディ1」課題として制作した。文献調査や現地調査により、渋沢栄一と「商法会所」のゆかりのある市内箇所を案内するマップとして印刷配布した。その過程で地元静岡市出身の受講生に渋沢栄一の静岡での功績について知っているかどうか尋ねると、全く知らなかったという¹。そもそも、小中高の段階でそうした地元の歴史や先人たちの功績について見聞する機会がなかったとのことである。また地元人が「静岡自慢」としてあげるものは大抵富士山や駿河湾などの自然環境や、みかん・わさびや海産物などの食品、輸送機・楽器などの産業といった要素であり、地域の歴史や先人の功績についてあげていることは少ない²。

他方、静岡市役所や静岡商工会議所など中心に、2019年頃より静岡市内ではその歴史遺産に注目する動きが俄に活発化しつつある。2019年に今川義元生誕500年を記念

1 このMAPのPDFデータは静岡県立大学ふじのくにみらい共育センターホームページよりダウンロードできる。<http://coc.u-shizuoka-ken.ac.jp/events/shibusawamap/index.html>（2021年12月閲覧）

2 たとえば静岡県庁公式サイト「静岡県おくにじまん」では「自然環境がよく、交通が便利な静岡県では、産業がたいへん発達しています。」とあり、郷土の歴史や人物を取り上げてはいない。<http://www.pref.shizuoka.jp/kids/industry/index.html>（2021年12月閲覧）

3 「今川さん」オフィシャルサイト <https://imagawasan.com/>
「非公式」であるが、静岡商工会議所では以下のように連携している。<https://www.shizuoka-cci.or.jp/imagawasan>（2021年12月閲覧）

し「今川復権まつり」開催されその功績を偲ぶ行事が開催され、「ゆるキャラ」として「今川さん」も制作された³。また、静岡浅間神社境内の静岡市文化財資料館を引き継いで駿府城代屋敷跡地（旧青葉小学校跡地）に「静岡市歴史博物館」が2023年に開館予定であり、静岡の近世以降の歴史文化に対する市民の関心喚起が図られているところである⁴。

このほど静岡市役所文化財課で地域史研究を行ってこられ、現在は豊橋市立図書館学芸員である岡村龍男氏により、渋沢が静岡に滞在した明治元年末から明治2年10月までの約10ヶ月間での功績にフォーカスを当てた本書が出版された。

本書の概要

本書の構成は以下の通りである。第1章「草奔の志士」では深谷・血洗島の有力百姓に生まれ家業の藍玉で商才を発揮した少年時代から、尊王攘夷に目覚め志士たちと交流した青年期までの足跡に触れている。第2章「慶喜に仕える」では、一橋家用人の平岡円四郎との出会いにより一橋家に取り立てられ、農兵育成・財政再建に手腕を発揮し1867（慶応2）年パリ万博使節団員の会計掛として抜擢されフランスへ派遣、倒幕後に失意の中で帰国するまでを幕末・維新の立役者との邂逅に触れながら描いている。第3章「『駿府』から『静岡』へ」では明治維新後の徳川家達移封による駿府（静岡）徳川藩成立までの駿府七藩（沼津、小島、田中、相良、掛川、横須賀、浜松）の動向を踏まえつつ「大御所時代」の繁栄と終焉から駿府徳川藩への移り変わりを描き、旧幕臣の大挙移住と受け入れる村落の負担、新政府に使えることをよしとせず無禄でも駿府に移住してきた武士の扱いなど課題山積の維新直後の駿府について説明している。ここまでは渋沢栄一が来静するまでの経緯である。

いよいよ第4章以降第6章までは静岡での渋沢の功績に焦点を当てている。第4章「静岡藩士としてのミッション」では渋沢のフランスからの帰国後、宝台院で謹慎隠棲中の15代将軍徳川慶喜への再会・帰朝報告から「商法会所」設立までの歩みについて、経済再建に向けた駿府豪商の萩原四郎兵衛（鶴夫）たちの動きに注目、再発見された萩原家の文書をベースに詳細に描いている。第5章「日本初の株式会社『商法会所』」では、駿府豪商と藩幹部らが共同して立案していた物産販売所案と渋沢のフランスでの見聞を軸に迅速に「商法会所」計画が立てられたプロセスについて、実質的に「商法会所」を運営していた駿府豪商の動向に注目しながら描いている。第6章「常平倉への改称」では「商法会所」が軌道に乗りつつも対立や緊張があったことを詳細に描いている。政府による紙幣使用命令とその価値の問題を背景に、静岡藩庁と

4 「静岡市歴史博物館 23年開館 初代館長に中村氏」『静岡新聞』2021年11月10日、「文化財資料館 収蔵品を移管 静岡市 歴史博物館などへ」同2021年12月9日。

岡村龍男著『渋沢栄一と静岡 改革の軌跡をたどる』静岡新聞社、2021年

「商法会所」を実質的に取り仕切り出資もしていた前述の萩原をはじめとする御用達商人たちの対立、また御用達商人間での摩擦などを描きながら商業中心の「商法会所」から農業もカバーする「常平倉」に改称する紆余曲折を詳細に記述している。

「商法会所」および「常平倉」を曲がりなりにも軌道に乗せた渋沢は1869（明治2）年10月には大蔵省出仕を要請され、静岡を後にする。第7章「大蔵省出仕と残された人々」では、事業拡大を目指していた矢先に渋沢が去った後、静岡で、「残された人々」つまり渋沢からの信頼が厚く藩庁との折衝役を務めた萩原をはじめとする御用達商人たちが「常平倉」を運営する奮闘や、その後1871（明治4年）廃藩置県で県に引き継がれるも翌年には解散する顛末について焦点を当てている。このあたりの経緯は、渋沢栄一研究でもこれまであまり語られることのなかった部分である。

第8章「維新再評価の機運のなかで」では渋沢栄一のかつての「主君」であった徳川慶喜の静岡での暮らしやその伝記編纂について、大政奉還後静岡にくだった「幕末三舟」の一人で渋沢を「小僧扱ひ」（『渋沢栄一伝記資料』別巻第6）した勝海舟との確執にも触れながら触れている。第9章「静岡 忘れがたく」では徳川家ゆかりの地としての静岡を、旧幕臣の親睦や育英会事業創設、ならびに現在の静岡県立図書館の前身となる「葵文庫」創設支援に関わるなど、離静以降の渋沢の静岡との縁について焦点を当てている。終章「相互作用がもたらしたもの」では本書の総括として、事業を動かした要素を、渋沢来静以前に物品売買所を共同運営しようと構想した駿府商人達のネットワーク・協働と、渋沢の「相場の駆け引きの強さ」や「他者を説得する力」が相互作用を生んだと結論づけている。また、「商法会所」「常平倉」に関わった御用達商人達がその後の静岡県経済や行政に手腕を発揮したことにも触れている。つまり廃藩置県による行政機構整備で戸長・副戸長に御用達商人も任命され地租改正の業務も担当し行政支援にも携わったことを評価している。また萩原と同じく御用達商人であった野崎彦左衛門はのちに「野崎銀行」を創始し（のちに静岡銀行に吸収）、尾崎伊兵衛は茶業に集中して紅茶伝習所を設立するなど、「商法会所」の残した商工業の功績について触れている。こうして「商法会所」は「郷土発展の礎」を築いたのである。

筆者が「今日、静岡県民が共通の歴史認識を持ちにくいのは『おらが郷土の殿様』がわかりにくい『非領国地域』であったことが原因」（p75）と述べているように、これまで地域の歴史が県民のアイデンティティとしてあまり共有されてこなかった。明治維新直後近代化に向けた渋沢らの奮闘から「共通の歴史認識」づくりのきっかけを筆者は提示している。

本書の焦点として、明治近代化の出発点としての静岡の評価と、渋沢や駿府商人たちおよび藩庁の緊張と協調のベストミックスの2点を挙げたい。

明治近代化の出発点としての駿府・静岡

本書の焦点は渋沢が駿府（明治2年6月より静岡へ改称）で過ごした明治元年末～翌年10月までの約10ヶ月を描いた第4章から第6章、およびその後の「常平倉」に触れた第7章にあるといえよう。

ただ、数多くある渋沢研究でもこの時期における静岡での活躍に焦点を当てているものは決して多くない。静岡県史では第1編「明治初年の静岡」でp40-45の約5ページだけ取り上げられているのみである。上田藤十郎による1938年「静岡藩の組合商法会所及び常平倉について」（『昭和高等商業学校研究部報』二輯）、本学経営情報学部教員であった佐々木聡による1994年「渋沢栄一と静岡商法会所」（『渋沢研究』7号）および1999年「渋沢栄一と静岡一商法会所と常平倉」（『静岡の文化』56号）、龍澤潤による2001年の「静岡藩商法会所の設立について一商法会所・常平倉の理念をめぐって」（『白山史学』37）がその数少ない研究に挙げられる。もっとも静岡大火や空襲による戦災などで多くの一次資料が散逸・焼失したこともあるが、これらの先行研究を踏まえつつ筆者は静岡市史編纂史料における年行事制の下で作成された「駿府町方文書」、商法会所御用達の萩原四郎兵衛（鶴夫）の残した「萩原家文書」、および茶業史・地域史など静岡に残る史料を用いて渋沢の静岡滞在10ヶ月を再構成したことは注目すべきところであろう。

第4章で詳細に述べられているが当初渋沢は静岡でかつての主君徳川慶喜のそばで農商に従事することを考えていた。しかし藩士平岡準蔵からの「勘定組頭」という藩役人の辞令に承服できず一度は拒絶、藩政の事実上トップであった中老大久保一翁（忠寛）の説得により、「勘定組頭格御勝手懸り中老手附」なるかたちで一応形の上では「静岡藩士」となり、「商法会所」の頭取としてその職務を果たす経緯について、自伝『雨夜譚』と日記の間の細部の違いを詳細に検討している。加えて、「商法会所」設立に関して駿府商人のパートナーたちについて、同章第2節「ビジネスパートナー萩原四郎兵衛」という形でクローズアップしている点は注目したい。筆者が渋沢の伝記も実は静岡滞在中に関して萩原の日記・記録をベースにしていることを明らかにしているように、萩原の果たした役割は大きい。萩原は元々の本業である茶問屋経営に加えて藩庁の公的役割もこなし、萩原家には明治初期の経済活動に関する膨大な文書・記録が残された。渋沢の伝記編纂の際に筆写され伝記に多くが掲載されたことで、萩原家文書・記録の原本の多くが第二次世界大戦の空襲で焼失しても何とか残存するかたちとなった。決して渋沢や藩庁が主導し、商人たちがフォロワーとなったのではなく、むしろ渋沢来駿以前に立てられた商人たちの構想が渋沢の来静によって再起動したという側面が明らかになっている。この経緯につき、筆者が渋沢サイドの証言のみに依ることなく、地域に残る史料を検討しながら丹念に追っている。これは注目すべきポイントである。

岡村龍男著『渋沢栄一と静岡 改革の軌跡をたどる』静岡新聞社、2021年

また、あまり脚光を浴びてこなかった渋沢来駿前の駿府藩の経済的課題についても筆者は注目している。第4章第3節「駿府町人に託された藩財政再建」では萩原ら商人（町人）たちの藩財政再建への貢献に焦点を当てている。財政再建という駿府藩政の課題に関して、商人たちのネットワークにより経済復興策が1868年6月から8月かけ、江戸から徳川家達についてやってきたばかりである藩庁行政トップの大久保一翁らと練られたことを上田藤十郎により再発見された史料を再検討しながら詳細に追っている。

これらはいずれも一部研究者の間でしか知られていなかった、もしくは一般の静岡市民にとって見過ごされてしまった「埋もれた歴史」であり、広く知らしめるべき歴史にしたいという筆者の思いが溢れている。

協調と摩擦

一方、渋沢来静まで、駿府の商人も藩庁も維新直後の混乱や経済的課題に無為無策だったわけではないことも筆者は強調している。1868（慶応4）年夏以降、無禄武士と米不足など困窮と混乱にあった駿府藩では、商人・藩庁双方が協力して乗り切るべく物産販売所の構想が立てられている（ちなみに沼津でも明治元年10月に「商社会所」という豪商を御用達に取り立て、沼津兵学校と連携して運営されるほぼ同様の組織が設立されている：「シリーズ沼津兵学校とその人材 沼津商社会所」『明治資料館通信』1996年4月25日、Vol.12 No.1, p2-3）。渋沢が西洋仕込みの「合本主義」つまり公益を追求するという使命や目的を達成するのに最も適した人材と資本を集め、事業を推進させる考え方を無為無策の地に適用したのではなく、藩庁と商人が共同出資する経済復興スキームをすでに構想していたところに渋沢が来訪したのである。

明治2年1月上旬には呉服町にあった下駄屋「川村屋」の二階の下宿に（この正月元日に帯刀をゆるされるなど藩中老大久保一翁の信頼が厚かった）萩原やパリ使節団同僚で静岡学問所教授を務めていた杉浦讓（愛蔵）が訪れ、商法会所の建白書作成に寄与していることが渋沢の日記からもあきらかであるとおおり、決して渋沢一人で西欧流の「コンパニー」が立案され実行に移されたわけではない。商人たちとの共同作業で作られた「商法会所」であったが、摩擦の連続だったのである。その内包する緊張関係にも第4章で触れつつ、第5章ではその経営の実態を明らかにしている。特に焦点を当てているのが、「商法会所」の構成メンバー「御用達」たちの活躍と奮闘である。第2節「練り上げられた規則」では「全市民戮力之商法」（戮力＝協力）として身分差別なく出資額多寡に関わらず加入できるようにするという、身分制がまだ色濃く残存していた維新直後の駿府では（同時期「学問所」で身分に関わりなく入学できたのと同じく）画期的であったことを触れている。「商法会所」への加入方法は融資を受けた複数人が連合して商業を営む「組合」から「商法会所」へ利潤を積み立て

る「組入」、出資を行った者が利子を受け取る「利金」、と三種類あり、現代の「組合金融」や銀行業の基礎となる事業であることがわかる。この事業を通じて「全領民利潤いたし候ための仕法」として、地元豪商の総動員による協力体制を構築（第3節「地元の豪商ら総動員」）したことを述べている。渋沢一人の力量で「商法会所」が経営されていたのではなく、商人・町人の協力関係をベースに運営されていたことが詳細に描かれている。

しかし、「商法会所」の運営も一筋縄ではいかなかった。「常平倉」への組織見直しについて、第6章で筆者は御用達商人間の認識の違いも浮き彫りにしている。これも明治2年6月の版籍奉還で新政府への一層の配慮を求められた際、藩の資金で独自事業を行うことが良しとされず組織改編が急務とされた。その際に穀物価格安定化のための「常平倉」と改称することとなった。ここにおいて大久保一翁や勘定頭平岡準蔵と協力しつつ「民情安定」をはかるべく豪農も取り込みながら乗り切ったのだが、その過程で小鹿村（現駿河区小鹿）の出島甚太郎（竹斎、のちに久能山東照宮宮司）や聖一色村（同区聖一色）の寺尾寛三郎という豪農・名主の協力を得たことに筆者は注目している。政治経済の混乱と凶作・米不足にあった静岡で、職・身分を超えた協力体制の構築として評価すべきことである。新政府との緊張関係がはからずも農民の巻き込みを促した経緯は興味深い。

第6章で描かれている通り、政府発行新紙幣の使用をめぐり、実際には新紙幣が額面の8割程度しか正金との交換レートがなく商人たちからの評判が良くないことについて渋沢が奮闘、凶作に見舞われた静岡の苦境を背景に、混乱の收拾につとめる経緯はこれまでの渋沢研究でもあまり光が当てられてこなかったところである。藩のために一定の資金蓄積を考えていた藩庁と殖産興業で積極的投資を望んでいた商人たちとの摩擦の間で苦悩していた姿はほとんど見過ごされてきた。決して渋沢が欧州帰りの万能の人物として全て丸く収めたのではないのである。

商人たちのネットワークによる殖産興業と財政難の藩庁との（対立・摩擦を含みながらの）連携、および新政府と静岡藩の緊張関係、その狭間で調整とリエゾンに奔走する渋沢…政治権力イコール「お上」が全てを規定するのではなく、官民が対等に連携して課題を解決する仕組みがまさしく静岡で創始された。フランスで軍人と銀行家が対等に会話する姿を見て衝撃を受けた渋沢が、帰国後の初仕事でそれを静岡で実現させたのだろう。まさしく近代化の第一歩が静岡で記されたことは間違いない。摩擦と功績のバランスをとりながら、この一連の流れをつぶさに筆者が記述していることはまさに特筆すべきことである。

終わりに：官民連携による経済振興スキームとしての「商法会所」

明治期に数々の企業を立ち上げ、「道徳経済合一」を提唱した企業家として、渋沢

岡村龍男著『渋沢栄一と静岡 改革の軌跡をたどる』静岡新聞社、2021年

の偉業が現在クローズアップされている。その渋沢が幕臣から転身し実業家としてスタートしたのはまさしく静岡であった。加えて、まさにフランスでの(ナポレオン3世治下でサン・シモン主義の影響を受けた)「資本主義」に直に触れた直後でもあった。往路途中フェルディナン・ド・レセップスによる民間資本でのスエズ運河建設中の様子を見聞し、パリ万博での各種の近代工業技術から廃兵院(アンヴァリッド)での社会福祉、さらには使節団の案内役であった銀行家フリュール・エラル(フロリヘラルド)の手引きで債券投資も行い莫大な利益をあげるなど、「自分の一身上一番効能のあった旅」(渋沢栄一「本邦公債制度の起源」『龍門雑誌』265号、p12、1910年)の記憶が新鮮なうちに静岡へやってきたのである。広く社会から「資本」を合わせ事業遂行する「合本主義」の発想がまさしく、藩庁の大久保一翁や平岡準蔵と連携しつつ、萩原ら駿府商人達の構想と共鳴した。渋沢の「合本主義」の思想と静岡側のパートナーが連携したことで、静岡は「策源地」すなわちその最初の実践の地となったのである。

渋沢が静岡で「商法会所」を興して150年余の現在、系列や業界を超えた事業連携、産官学民連携やスタートアップ育成、民間非営利セクターと協働するソーシャルイノベーションなど、組織の境界やセクターを超えて協働する民間営利企業の産業復興や経済再生が静岡県内でも試みられている。そんな現代だからこそ、150余年前に静岡で、立場や利害の違いがありながらも渋沢や藩役人、商人たちが奮闘した歴史から教訓やヒントが導き出せるのではないか。本書で描かれている明治2年の10ヶ月余の歴史は、今の我々にとって全く無関係な話ではないのである。

「伝統とは灰の崇拝ではなく炎を絶やさぬこと」(グスタフ・マーラー)である。静岡にとってその「炎」とは何か、非常に論争的な問題であるが、少なくともここで筆者は渋沢たちの「商法会所」「常平倉」を舞台にした、摩擦を抱えながらも立場を超えて協力し課題に立ち向かう姿勢を一つの「炎」として提示している(帯書きでは「令和に響く熱きエール」とある)。終章で現代の低迷する静岡県経済の再興やそのための官民連携のあり方など、現代的課題と渋沢たちの残した功績を結びつけるさらに踏み込んだ提案が筆者から提示されれば、さらに読み応えがあっただろう。ただ、それは読者に突きつけられた課題なのかもしれない。

評者としては、単なる過ぎ去った「灰」の崇拝ではなく、渋沢たちの残した「炎」の記録として本書が生かされることを望みたい。経済復興やイノベーション、スタートアップ支援など、経済復興をめぐる現代的課題に直面している人々に本書をぜひお勧めしたい。今後、組織の枠やセクターの境界を超えた「オープンイノベーション」や事業コラボレーション、すなわち多様な「合本」がこの静岡で活発化すれば、草葉の陰で渋沢たちはどのように我々を評価するのだろうか。